



地震直後の三叉坑（筆者撮影）

台湾大震災（一九九九年）

故郷再建への長い道のり・三叉坑村の物語

陳 亮丰（翻訳 川上桃子）

一九九九年九月二一日、太平洋に浮かぶ台湾の島は、炎暑の夏に終わりを告げ、中秋節を間近に控えた爽やかな季節を迎えていた。作物が豊かな実りの秋を迎え、人々が団欒のときを心待ちにしていたこの日の深夜一時四七分、台湾中部で、マグニチュード七・三の大地震が発生した。この地震により全壊ないし損壊した家屋の数は約一〇万棟。死者は二四五五人、行方不明者は四八人に達した。この地震はまた、大規模な山崩れを引き起こし、山地の農村に深刻な被害をもたらした。台湾の過去一〇〇年で最も深刻な被害をもたらした、最も広範な被災地を生み出したこの地震を、台湾の人々は「九二一大地震」と呼ぶ。

●移転を余儀なくされた村、三叉坑部落

九二一地震の後、多くの村が廃墟のなかから立ち上がり、再建への道を歩み始めた。しかし、限られた紙幅のなかで、復興への長い道のりを描き出すことは難しい。本稿では、被災地の一つである台湾原住民（以下、台湾での呼称に従い「原住民」を用い

る）の村・三叉坑部落の復興の経験を、ある青年の歩みに焦点をあてて紹介する。ただし、以下の記述は重点のみに絞ったものであり、また筆者の視点からみたものであることを、予めお断りしておきたい。

台中県和平郷自由村にある三叉坑部落は、台湾の原住民族の一つであるタイヤル族の村である。部落の元々の広さは約〇・八五平方キロ、四十数戸の世帯がキリスト教教会をとり囲むように立ち並ぶ、山の上の台地の村であった。この村には、産業らしい産業はなく、住民の多くは野菜を植えたり、日雇い労働をしたりして、辛うじて生計を立てていた。三叉坑は、貧しくひっそりとした、名も知られぬ村だったのであり、地震が発生するまでは、国や地方政府がとりたてて顧みる必要もない静かに忘れ去られた山村だったのである。

しかし、地震によって三叉坑部落が全壊すると、国による介入が必要となった。地震発生から一週間後に、台湾政府が、移転が必要となった村落のリストとしてメディアに発表した七つの村のなかに、三叉坑も含まれていたからである。

大地震によって、三叉坑の地盤は地滑りを起こしてしまった。また村の位置は、断層に近かった。これが、専門家が三叉坑を危険な状況にある部落と判定した原因の一つであった。しかし、三叉坑の部落が全壊した最も大きな原因は村の貧困にあった。老朽化した建物は、大地震の衝撃に耐えられず、これが二人のタイヤル族の住民の命を奪ったのである。

●ある青年の帰郷

亡くなった村人の一家の長男である林建治は、台北で働いていたが、母と弟を失った痛みと後悔のなかで、故郷に帰り、父の面倒を見ようと決心した。

林建治は、最初から村の復興に積極的な身を投じたわけではなかった。むしろ、都会から帰郷したこの若者は、父親の面倒をみることを最優先にして、タイヤル族の村の仲間たちからは距離を置く生活を選んだ。地震が発生した年の冬、村人の大部分は、部落から三キロ離れたところに政府が建設した仮設住宅で仮住まいをしたが、建治は簡単な材木製の小屋を建てて、廃墟となっ

た村のなかにとどまることを選んだ。彼は部落のなかでは数少ない、教育を受けた中堅世代の人間であったが、自分の意見を主張することは多くなく、役場で会議が開かれる時には、人々の後ろに立って、遠く離れたところから、移転計画の詳細について静かに耳を傾けていた。

和平郷の郷役場が台北の民間会社に委託して作成した三叉坑の移転・復興計画の骨子は、村の元々の場所での住居の再建は行わず、土地の収用と用地計画の変更によって、新たな村を建設するというものであった。地震の前に部落があった場所には住民を住まわせることとし、住居の建築を禁止して、新しい教会や、コミュニティ活動センターや、緑地や駐車場にあてるという内容であった。

他方、住民の新たな居住区域としては、村の東側にある一平方キロ強の平らな農地を買い上げ、震災復興に関わる暫定法規によってこれを建築許可区域に変更し、転居が必要となる四五の世帯に分配して住宅用地にあてようという計画であった。この案は、二〇〇〇年四月に行政院原住民族委員会の審議を経て行政院の査定を通った。予算総額は八二三〇万元（約二・八億円）となった。

しかしこの計画のなかで、国が責任を負うのは、土地の収用と用地計画の変更、公共建設に限られ、住居の再建については実質的な計画が存在しないに等しかった。計

画のなかでは、住宅については被災者が自力で再建すること、国は小額の補助を与えるとともに銀行からの融資が得られるよう、協力することが示されたのみであった。

●夢と現実と

村人の多くが「政府が銀行からの借り入れを得られるよう協力する」という文言に喜んでいたとき、林建治は、非常に不安な気持ちに襲われていた。

九割以上の同胞が失業状態にある村に対して、どうして銀行が資金の貸付を行おうと考えるだろうか。むしろ、村人は絶対に銀行から借金をしてはいけないのではないだろうか。借金という道を選べば、その分子どもたちの教育費や生活費が圧迫されてしまい、村は大きな代償を払うことになるだろう。さらに、借金が返せなくなってしまう。家は外地の人々の手にわたってしまうだろう。村落移転計画は、三叉坑の人々を、自分たちの家から追い出すことになってしまうのではないだろうか。

建治がこうに考えたのは、彼が、長年にわたる故郷を離れた生活のなかで、原住民をとりまく環境がいかに不公平なものであるかを痛感していたからであった。彼は故郷に戻ってから、都会で出稼ぎ労働をしていた頃の自分は、あたかも洗脳されていたかのように、平地の人々の価値観にあわせる努力ばかりをしていて、部落のことを忘れてしまっていたと思うようになって

いた。このような思いを抱いていた彼にとって、「山の中の小スイスを作り出す」ことを掲げる村落移転計画は、強い不信感をかきたてるものであったし、銀行からの資金の借り入れという話も信じられるものではなかった。

林建治は「元々の場所での村落の再建」という選択肢もあるということを力説した。もし元の場所に村を再建するのなら、三叉坑の農地を収用する必要はない。そうなれば、引き続き野菜を育てることができる。そうすれば、村人たちの今にも崩れそうな脆い生活の基盤を支えることができるのではない。それに、郷役場の計画のなかに盛り込まれ、村人たちの憧れの的となつてい

る高価なセメント製の家を建てなくても、分相応の家を自力で再建すればいいではないか。もし本当に八〇〇〇万元もの予算があるのなら、まずは部落の基礎をしつかり立て直して、そのあとで住宅の再建に予算を使えばいいのだ。

こうして彼は、考えるほどに焦りを覚えるようになった。しかし、「元の場所での再建」という声をあげ始めた時に、彼は村人の理解を全く得られないことを悟った。

●意見の対立と再建の始まり

部落のある長老は、建治の考えに強く反対した。彼は、村の移転は新たなチャンスであるとして、住宅建設用地の割り当てや銀行ローンの補助に強い期待を抱いていた。

この長老は努力家で、三叉坑部落の数少ないセメント製の家を自力で建てた人でもあった。その家もまた、地震で損壊してしまつたが、彼は、村の移転計画を受け入れるため、修理可能であつた家をあえて手放す決意をし、手続き書類にサインをしたのであつた。この長老もまた、建治と同じような不安を抱いていたが、自分の力で再び立ちあがれることを信じ、そのためには銀行からの融資が必要であると考えていたのだ。

建治には、この年老いた長老の置かれた状況もよく分かつたし、同時に、部落の多くの住民が、この長老のような力を持ち合わせていないこともよく理解していた。年老いた者、病気を抱えた者、酒におぼれる者——やせ細り、震える彼らの肩が、どうしてセメント製の住宅などという重荷を背負えるだろうか。建治は、「いや、それは無理なことなのだ」と低くつぶやくほかなかつた。

意見の衝突は、枚挙にいとまのないほど発生した。しかし、タイヤル族の村人の多くは、住宅用地と住宅ローンを手にするため、少数者があげる不安の声を排除した。そして、住宅建設の負担の重さと自らの経済基盤の脆さを熟慮することもなく、村の移転計画を支持し、歩みを進めた。

二〇〇〇年の冬には、郷役場が土地の収用を開始した。農地を手放すまいと最後まで頑張っていたある家族も、周りから受ける圧力と、同胞との心情的な絆の前に、つ

いに屈した。二〇〇一年冬には、土地の収用がほぼ終了し、シヨベルカーが部落へと入ってきて、公共工事が開始された。三叉坑の事例は、震災後の最初の村の移転となつたため、多くの法令上の問題を解決せねばならず、郷役場の建設課長である林緯国は多数の困難にぶつかった。

台湾では、歴史的な経緯により、原住民の土地は国の所有とされ、原住民は土地の使用権を有するのみで実質的な所有権を持たない。そのため原住民の人々が銀行融資を得ることは難しく、経済的な必要に迫られた場合には、しばしば非合法裡に土地を漢人に譲らざるをえなかつた。そのため、原住民の土地の多くが漢人によつて違法に所有されるという実態が生じている。これが、林課長が取り組む土地問題を困難なものとした。三叉坑では、土地の収用手続きが完全には完了していない状況のもので、二〇〇二年に公共部分の工事が完成した。

こうして、かつての三叉坑の村があつた場所から、村の新たな移転先となる農地へと向かう一帯に、大型の土止め擁壁や整然とした道路、排水溝、緑地、モダンな街灯といった、かつての三叉坑には存在しなかつた数々のものが完成した。しかし、広大な空き地のうえには家はなく、人もおらず、村落の姿も見あたらなかつたのである。

挫折と困難

実はこのとき、部落はすでに被災後すぐ

に政府から受けた補助を使い果たしてしまつていた。村人の住宅の建設は不可能となつてしまつていたのである。

自身もタイヤル族である建設課長の林緯国は、村人の家が建たなければ村の移転計画は到底完成しえないと考え、三叉坑の人々のために、融資と援助を求めて奔走した。しかし彼が見いだしたのは、銀行の態度が非常に高圧的であることと、原住民の主管機関である原住民委員会が責任逃れに終始するという事実であつた。林緯国は、つらい思いをかみしめながら、村人たちに、銀行からの借り入れは不可能になつてしまったことを告げるほかなかつた。

こうしてついに、住宅建設をめぐる深刻な苦境が露呈した。村落の移転先の土地には草が伸び放題に生え、かつての予言に答えるかのような悲しい姿をさらした。

ことここに至つては、責任のありか进行争つても仕方がなかつた。なおさら、仮設住宅の中で部落の再建を待ち続ける日々の不便とつらさは、言い表しようもなかつた。子どもたちは一日一日と育っていくのに、彼らの童年時代の記憶に残るのは、仲むつまじい部落の姿ではなく、狭くて暑い仮設住宅と、失業に加えて家の再建問題をめぐって父母たちが言い争う姿なのである。

苦難のなかでの成長

このような年月を経て、建治もまた成長を遂げた。二〇〇三年、建治は原住民のコ



再建した三叉坑の住宅（筆者撮影）



2005年3月の三叉坑遠景（筆者撮影）

コミュニティ活動組織である「大安溪部落ワークステーション」を設立した。建治と仲間たちは、一貫して村の移転計画に反対し、部落の元々の場所での住宅再建を主張してきた。しかし、村の移転計画がもはや引き返せないところまで来てしまった以上、建治たちは、仮設住宅で暮らす村の人々が自らの家に戻れることが最も大切であると考え、自らの怒りをおさえて、郷役場の建設課長と力をあわせ、村の住宅再建をめぐる困難にともに立ち向かうことにした。

これらの若者たちは、何年にもわたって人々から誤解を受けていたが、村の移転計画に関する問題への関心を失ったことは一度もなかった。様々な経験を経て、建治も老人たちとうまく付き合えるようになった。彼は、部落会議を主催するようになり、タイヤルの仲間を巻き込んで、復興計画の詳細について討論した。大安溪ワークステーションは、政府の補助を申請し、長老たちに若者を指導してもらって、タイヤル族の伝統的な竹製の家屋や遊歩道を一緒につくる活動を行った。一緒に働くことを通じて、村人は自信を得ることができた。

また大安溪ワークステーションは、三叉坑住宅再建委員会の設立に協力した。この委員会では、村の長老や中堅世代が委員となって、定期的に会合を開き、役所の文書に不慣れた村人たちのために様々な解説を行って、村人が自分たちで物事を決められるよう手助けをした。三叉坑は地震から四

年を経て、ようやく住民たちが村の移転に参加できる方法を編み出したのである。

●故郷を再生する力

もしあなたが今、三叉坑を通りかかったら、谷の内側にむかつて、青い瓦屋根と白い壁をもつ、よく似た形式で建てられた別荘風の建物が立ち並ぶコミュニティを目にするだろう。多くの観光客が、遠くからこの様子を見て目を輝かせ、その移転計画の成功に驚く。しかし、村の中に入っていけば、家の屋根が安物の金属でできていること、外壁は薄くセメントを塗ったものに過ぎず、間仕切りも少ないつくりであることが分かる。細部のほうほうに、この村の経済力の限界が現れているのだ。しかし、これは、この計画に関わった全ての人が、持てる力と資金力を出し尽くしてやり遂げた成果なのである。

三叉坑の移転計画が悲劇への道を免れた鍵となったのは、地震後四年目に獲得した民間基金「九二一震災復興基金会」の全面的な支援であった。まず、香港からの支援金が三叉坑に投入され、家屋の再建計画に一筋の希望の光が射しこんだ。しかしその後、再建への道のりは順調なものではなかった。土地の権利問題の解決が順調には進まず、土地を建築許可区域に変更することができなかったため、三叉坑はさらに多くの問題に直面することとなった。ついに二〇〇四年末、復興事業を担当する国の公

務員があいだに入って調整を行い、ようやく建築許可区域への変更と、建築許可の取得が実現した。また「九二一震災復興基金会」からの追加の財政支援も得られた。こうして二〇〇五年一月に家屋の再建が完成し、二〇〇六年一月に、村の全ての人々が仮設住宅を出て、新たな家へと帰ることができたのである。

危機に面した村の移転計画を救うために費やされた資金の総額は、家屋の再建補助に三六〇〇万元強、住民が自己負担した金額が五〇〇万元強であった。建築家や建設会社の協力もまた、大きな支えとなった。多くの善意の援助のもと、村の人々は幸運にも、自らの故郷・三叉坑に帰ることができたのである。

大安溪ワークステーションは、今でも、貧しさと闘いながら、村の人々の生活を改善するための努力を重ねている。数多くの困難を克服して村の移転を完成へと導いたこれらの力は、地震が発生したあの年、村の移転計画案の書面のなかでは計画されようもなく、村の人々ですら予想だになかった力なのであった。

（ちえん りゃんふおん／ドキュメンタリー映像作家、映画「三叉坑」監督
かわかみ ももこ／アジア経済研究所
新領域研究センター）